様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25 年　5 月　29 日現在

機関番号：３４４０４
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2009～2012
課題番号：21320143
研究課題名（和文）　帝国とコモンウェルスの総合的研究―国際秩序形成機能を中心に
研究課題名（英文）　Comprehensive Research on Empire and Commonwealth: Focusing on Their Roles in the Formation of Contemporary International Orders
研究代表者
山本　正（YAMAMOTO TADASHI）
大阪経済大学・経済学部・教授
研究者番号：10200817

研究成果の概要（和文）：本研究では、20 世紀前半のブリティシュ・コモンウェルス・オヴ・ネーションズならびにそれが発展・変容した世紀半ば以降のコモンウェルス・オヴ・ネーションズが、きわめて柔軟・包括的なシステムとして自ら変容するとともに、ポスト帝国のソフトパワーとして、グローバル国際秩序の形成に重要な役割を果たしてきたことを歴史学的観点・方法をもって明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research project demonstrated from historical viewpoints that the (British) Commonwealth of Nations in the 20th century was born and had grown as a very flexible and inclusive system, and had played an important role for the formation of contemporary international orders.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2010 年度	3,100,000	930,000	4,030,000
2011 年度	3,200,000	960,000	4,160,000
2012 年度	4,400,000	1,320,000	5,720,000
年度			
総　計	13,700,000	4,110,000	17,810,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学、西洋史
キーワード：西欧近現代史、帝国、コモンウェルス、国際政治経済秩序

１．研究開始当初の背景

1990 年代後半まで、日本では「コモンウェルス」に関する歴史研究は、殆ど皆無であった。木畑洋一「帝国の残像」山内昌之他編『帝国とは何か』（岩波書店，1997 年）は、イギリス帝国から「コモンウェルス」への編成替えに注目するとともに、国際協力機構としての役割を指摘した。また、木畑洋一・川北稔編『イギリスの歴史』（有斐閣，2000 年）と『イギリス帝国と 20 世紀（全５巻）』（ミネルヴァ書房，2004 年～）は、イギリス帝国から「コモンウェルス」に至る歴史的展開を扱っている。しかし、いずれも中核（イギリス）から周辺（構成地域）への影響を強調しがちで、「中核－周辺」間の双方向的ベクトルや周辺間の多元的ネットワークの存在など、「コモンウェルス」構成地域間関係、ひいては「コモンウェルス」の構造自体を解明してはいない。加えて、「コモンウェルス」が国際秩序の形成・維持に果たした役割を、「コモンウェルス」の構造に注目して考察する歴史研究は手つかずのままである。

他方、海外に目を向ければ、1960 年代を代表する Nicholas Mansergh の研究は、憲政・制

度面に限定されていた。今日では W.David McIntyre が「コモンウェルス」の変容を政治・社会・文化面にわたって論じているが、総じて「コモンウェルス」の歴史研究は、アジア・アフリカの旧植民地の脱植民地化とイギリスの対応という新コモンウェルスに重点が置かれており、新旧のコモンウェルスからなる「コモンウェルス」を包括的に把握する視点を欠いている。また近年、旧コモンウェルスを中心とする「ブリティッシュ・ディアスポラ British Diaspora」で形成された社会的文化的紐帯を介した交流・協力・同盟関係に注目する研究が出されている。かかる見方が新コモンウェルスに適用できるか疑問が残るが、「中核―周辺」関係について、従来の≪支配―従属≫に代わる新しい捉え方を促す可能性を秘めている。

２．研究の目的

本研究の目的は、「コモンウェルス」の歴史的経緯と今日的意義について、以下の４点に特に注目しながら多面的に考察し、「コモンウェルス」に関する総合的歴史研究をめざすことにある。

（１）「コモンウェルス」の内的構造とその変容を、イギリス帝国・旧コモンウェルス・新コモンウェルスの長期的タイムスパンにわたって、思想・政治・外交・社会・人種などの観点から考察する。

（２）（１）の考察において、「コモンウェルス」の構成地域間関係のみならず、他の地域との関係にも留意する。

（３）「コモンウェルス」の過去および現在の有り様が、他の近代帝国（及びポスト帝国）といかに異なるのか、近代帝国（及びポスト帝国）の国際比較も行なう。

（４）「コモンウェルス」の形成・変容とグローバルな国際秩序の形成・変容とがいかに結びつき影響を及ぼしあっていたかを、国際政治・経済史の観点から考察する。

３．研究の方法

（１）各メンバーがそれぞれ担当の役割（山本はアイルランド史の立場からの「コモンウェルス」の内的構造の研究、細川はカナダ史の立場からの「コモンウェルス」の内的構造の研究、大津留はハプスブルク帝国史の立場からの「コモンウェルス」の内的構造の研究、岩井は思想史的系譜の観点からの「コモンウェルス」の内的構造の研究、平野はフランス帝国史の立場からの「コモンウェルス」の変容過程・要因の研究、旦はグローバル化の観点からの「コモンウェルス」の変容過程・要因の研究、半澤は国際関係論の立場からの「コモンウェルス」の変容過程・要因の研究、松本は人種主義等の影響という観点からの「コモンウェルス」の内的構造の研究、川本は文化的ネットワークの観点からの「コモンウェルス」の内的構造の研究、前川はアフリカ諸国との関連からの「コモンウェルス」の変容過程・要因の研究、浜井は移民という観点からの「コモンウェルス」の変容過程・要因の研究、山口はイギリス外交史の立場からの「コモンウェルス」の変容過程・要因の研究」）について個別に研究を進めた。

（２）年２回もしくは３回、メンバーによる研究会を開催して各自の研究成果を報告、議論するとともに、研究成果の発表（論文集刊行）に向けて、メンバー相互で研究課題の調整、すりあわせを行った。

（３）海外から研究者（ロンドン大学コモンウェルス研究所長フィリップ・マーフィー教授）を招聘してワークショップを行い、共同研究への理解を深めた。

（４）イギリス帝国史研究会例会の場を借りて報告会を行い、科研メンバー外の参加者から意見を伺った。

４．研究成果

（１）コモンウェルスの内的構造やその変容については、当初から柔軟で包摂的な組織であったこと、旧から新コモンウェルスへの移行、さらに新コモンウェルス自体の変容においても人種問題が重要な役割を果たしていたこと、コモンウェルス的性格を有する帝国や他の組織が存在した（する）ことが明らかになった。

（２）コモンウェルスの形成・変容とグローバルな国際秩序の形成・変容との間には密接な関連や相互的影響があったことが明らかになった。

（３）コモンウェルス史に多角的にアプローチした本研究は、わが国においてまだ端緒についたばかりのコモンウェルス史研究の今後の発展にとって重要な踏み台となるものと確信する。

（４）本研究は政治・経済史的側面からのアプローチに重心があった。今後は、重心を社会・文化史的研究に移動させ、より総合的で有機的な観点からコモンウェルスの歴史と実態を考察する必要があろう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４３件）

① 岩井淳、コモンウェルスを創出する―ピューリタン革命と政治文化、静岡大学人文論集、 査読無 63 巻 2 号、2013、41‐74

② 平野千果子、＜フランス語＞という空間形成－植民地帝国の変遷とフランコフォニーの創設、武蔵大学人文学会雑誌、査読有、44 巻 3 号、2013、531‐575

③　松本佐保、イギリス外交における文化的プロパガンダの考察 1908～56 年、国際政治、査読有、173 号、2013 年、1‐15
④　Hamai, Yumiko, Un-homely Welcome: The Resettlement of the Asians Expelled from Uganda(1972-74), The East Asian Journal of British History, 査読有、3 巻、2013 年、 27‐51
⑤　旦祐介、The Dilemma of Today's Global Governance: Neo-Trusteeship and Privatization, Colloquium on Post-Hegemonic Global Governance, E-Journal、査読有　2012 年号、 2012、41‐48
⑥　半澤朝彦、国際政治学と音楽（２）－イギリス非公式帝国と「伝統の創造」、国際学研究（明治学院大学国際学部）、査読無、42 号、2012、49‐56
⑦　川本真浩、「グレニーグルズ合意」（1977 年）にいたる道（一）－コモンウェルス事務局の動きを中心に－、海南史学　査読有、50 号　2012、46‐65
⑧　前川一郎、イギリス対外援助と帝国の解体、ヨーロッパ文化研究、査読有、13 巻、2012、89‐129
⑨　山口育人、第二次世界大戦後のスターリングエリア再構築、帝京大学短期大学紀要、査読無、32 号、2012、63‐122
⑩　山本正、同時代的・世界的状況のなかでみたアイルランド「独立」、大阪経大論集、査読無、62 巻 3 号、2011、183‐191
⑪　細川道久、カナダとコモンウェルス－1950 年代中葉の F・H・アンダーヒルのコモンウェルス論：解題ノート（Ⅱ）、人文学科論集（鹿児島大学法文学部）、査読無、74 巻、2011 年 85‐109
⑫　川本真浩、エンパイア・ゲームズの「前史」と第一回大会をめぐって、海南史学、査読無、49 号、2011、92‐112
⑬　旦祐介、Globalization in the 20th Century: A Comparison of Smuts' practical suggestion and the Covenant of the League of Nations、東海大学教養学部紀要、査読無、41 巻、2011 年、273～281

〔学会発表〕（計２２件）
①　MAEKAWA, Ichiro, Neo-colonialism reconsidered: a case study of East Africa Institute of Historical Studies（招待講演）2012 年 12 月 3 日、Institute of Historical Research, London, UK
②　MATSUMOTO, Saho, Pan-Asianism reactions against the White superiority network and the origin of the Second World War: attempted racial solidarity and its failure, Constructions of Race and Racism in East Asia: East-West Perspectives（招待講演）2012 年 9 月 14 日ドイツ防衛大学（在ミュンヘン）、ドイツ
③　HANZAWA, Asahiko, The UN and the end of the British Empire, British International History Group, September 9, 2011, Glasgow, UK
④　HOSOKAWA, Michihisa、Canada's Long Path to 'Decolonization': Empire Day as a Case Study、Empire State of Mind: Articulations of British Culture in the Empire, 1707-1997、2011 年 5 月 27 日、Lingnan University, Hong Kong, China
⑤　MAEKAWA, Ichiro, British Aid and Decolonization 1950s-1970s, The 4th Epstein Memorial Lecture, 2011 年 3 月 8 日, London School of Economics and Political Science, UK
⑥　細川道久、もう１つの脱植民地化－カナダ・ナショナリズムとイギリス帝国、東北学院大学ヨーロッパ文化研究所公開学術講演会、2010 年 11 月 27 日、東北学院大学
⑦　HAMAI, Yumiko、There is no place like home?: the resettlement of the Asians from Uganda, Immigration and Re-imagining 'Home', 'Race', Ethnicity and Gender in Post-Imperial Britain（イギリス帝国史研究会特別セッション）、2010 年 6 月 5 日、 東京大学
⑧　YAMAGUCHI, Ikuto, The Development and Activities of ECAFE, 1947-1965, 15th World Economic History Congress, 2009 年 8 月 6 日、 Utrecht, Holland

〔図書〕（計２２件）
①　細川道久、彩流社、「白人」支配のカナダ史－移民・先住民・優生学－、2012 年、366
②　平野千果子（木畑洋一）、岩波書店、岩波講座東アジア近現代通史７：アジア諸戦争の時代 1945-1960 年、2011 年、214‐234
③　浜井祐三子（木畑洋一・後藤春美）、ミネルヴァ書房、帝国の長い影－20 世紀国際秩序の変容－、2010 年、229～248
④　前川一郎（永原陽子）、青木書店、「植民地責任」論－脱植民地化の比較史、2009 年、278‐309

６．研究組織
(1)研究代表者
山本　正（YAMAMOTO TADASHI）
大阪経済大学・経済学部・教授
研究者番号：10200817

(2)研究分担者
細川　道久（HOSOKAWA MICHIHISA）
鹿児島大学・法文学部・教授
研究者番号：20209240

大津留　厚（OTSURU ATSUSHI）
神戸大学・人文研究科・教授
研究者番号：10176943

岩井　淳（IWAI JUN）
静岡大学・人文社会科学部・教授
研究者番号：70201944

平野　千果子（HIRANO CHIKAKO）
武蔵大学・人文学部・教授
研究者番号：00319319

旦　祐介（DAN YUSUKE）
東海大学・教養学部・教授
研究者番号：10207277

半澤　朝彦（HANZAWA ASAHIKO）
明治学院大学・国際学部・准教授
研究者番号：80360882

松本　佐保（MATSUMOTO SAHO）
名古屋市立大学・人文社会系研究科・教授
研究者番号：40326161

川本　真浩（KAWAMOTO MASAHIRO）
高知大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：20314338

前川　一郎（MAEKAWA ICHIRO）
創価大学・文学部・教授
研究者番号：10401431

浜井　祐三子（HAMAI YUMIKO）
北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授
研究者番号：90313171

山口　育人（YAMAGUCHI IKUTO）
帝京大学短期大学・現代ビジネス学科・講師
研究者番号：20378491